

# 表情と人相との歴史的考察

## A historical review; facial expression and physiognomy

飯沼壽孝

Toshitaka IINUMA, M.D.

### 和文要旨

広義な表情とは感情による表現の共同運動であって、顔の表情、身振り、姿勢、並びに態度が含まれる。顔は感情による表現が最も顕著に表れる部位であるために、狭義な表情とは顔の表情である。顔の表情は感情の指標であり、表情を観察して感情が判断できる。また感情の表現は普遍的である。表情とは顔面皮膚に接着する表情筋が収縮して顔面皮膚に皺、溝、並びに凹みを生ずる現象である。表情筋の収縮は顔面神経の刺激によるが、顔面神経は何らかの高次な経路により感情から刺激を受ける。表情は瞬時に表れて永続することはなく、跡形もなく消失する。歴史的な諸古典書の考案によれば、ある個人に特有な人相も表情の一種であって、ある感情を繰り返して持つか、常時保っていると、感情による表情が習慣化し固定して人相が形成されるという。それは表情を作りだす表情筋が、常時緊張状態になるか、肥大化するために、顔面皮膚に恒常的な形態を生じて、表情が固定化することによる。ある感情が繰り返すか、常時保持される要因は、気性、性格、精神状態、身体状態、生活様式、生活環境、職業、或は様々な社会的な条件である。人相には人の過去が総合して反映するのである。

キーワード：感情、表情、習慣化した表情、固定化した表情、人相

Keywords : Emotion, Facial expression, Habitual expression, Fixed expression, Physiognomy

### 1. はじめに

顔の表情が感情を表現する事に信憑性を有するか否かについては、1), ある顔の表情がある感情の指標であるのか、2), また、顔の観察者が表情から感情を判断できるか、3), 感情の表現は普遍的であるか、などの古典的かつ現代的な問題があるが、これらは肯定的に証明されている [1]。また、顔には感情の表現以外に外見に表れた雰囲気や表情がつくりだす人相があり内面の性格や人格をあらわすことは事実である [2]。古典書には、哲学者、画家、美術論者、心理学者、解剖学者、人類学者、並びに医学者らによる表情と人相の学際的な論議が闊達に成されて来て、表情と人相との間の因果関係についての考察の記載が残されている。本稿は種々多彩な専門家諸氏による古典的な記載を検索して、とりまとめを試みたものである。

### 2. 表情と人相の解剖学的、生理学的概観

本論に移る前に解剖学者 Hjorstjöl[3] と Huber[4] を参照して表情と人相の解剖学的、生理学的な知見を検討する。まず、表情と人相の定義を行なうと、広義な意味での表情は、感情を発端として何らかの神経回路を経由して、人体に表現が現れる共同運動である。顔の表情に加えて、身振り、姿勢、並びに態度が含まれる。顔はこの表現（表情）が最も顕著な部位である。狭義な意味での表情とは顔の表情を指し、本稿ではこの意味での「表情」を使用する。表情の特徴は瞬時に現れて痕跡を残さずに消滅することである。人相とは、固定した個性的な表情で、表情筋とその運動に従う皮膚とが成す各個人に特有な形態である。

解剖学的な顔の原形では内方から顔面骨、筋肉と皮下組織並びに皮膚を含む軟部組織、及び眼、鼻、口などの器官が基本的な形成要素である。この顔の原形は外観の形態を成すが表情や人相には影響を及ぼさない。感情による顔の表情筋の収縮